

Oral (Theme) | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

🎵 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 🎵
Room2201(Education and research building block2 2F 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

Chair:Hironori Tanigama

3:30 PM - 3:50 PM JST | 6:30 AM - 6:50 AM UTC

[競技スポーツ-B-01]

競技会参加の目的とチームのあり方について（コ）

大学体操競技部における例をもとに

*Naomichi Matsuyama¹ (1. TENRI Univ.)

3:50 PM - 4:10 PM JST | 6:50 AM - 7:10 AM UTC

[競技スポーツ-B-02]

Preliminary development and implementation of a mental health literacy education for sport teams（心）

Mental health literacy in competitive sport settings

*Yasutaka Ojio^{1,2} (1. National Center of Neurology and Psychiatry, 2. The University of Tokyo)

4:10 PM - 4:30 PM JST | 7:10 AM - 7:30 AM UTC

[競技スポーツ-B-03]

チームスポーツにおけるエリート競技者の「育成」と「強化」に関する検討（哲）

*Itsuki Otomo¹ (1. university of Tsukuba)

Oral (Theme) | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 📍
Room2201(Education and research building block2 2F 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

Chair:Hironori Tanigama

3:30 PM - 3:50 PM JST | 6:30 AM - 6:50 AM UTC

[競技スポーツ-B-01] 競技会参加の目的とチームのあり方について (コ)
大学体操競技部における例をもとに

*Naomichi Matsuyama¹ (1. TENRI Univ.)

現代日本のありとあらゆる現場において「多様性」というキーワードのもとに、個人の尊重が叫ばれていることは今更強調するまでもないといえる。一方で競技スポーツの現場では、すべての選手に均等に出場機会が与えられるわけではない。大学部活動においては、競技会に出場できない選手が競技役員などで運営に回ることでその競技活動が成立しているというのも現実として受け止めなければならないだろう。部内予選などを勝ち抜いて競技会に出場権を得るためにはそれ相応の努力が必要であり、その結果の権利であることは言うまでもない。しかしながらその背景には権利を獲得できず、応援や運営サポートに回る選手も存在している。場合によってはその際の経費は自己負担であることも少なくないのではないかな。出場権を勝ち得た選手は、部やチームを代表して出場するという形になり、その期待に沿った立ち振る舞いが求められるであろう。しかしながらやはり個人としての目標達成に重点を置きたくなる側面も否定できないといえる。このような際には、チームとしての規範意識を醸成させつつも、各選手の「個」を尊重させるためのバランスが重要になり、指導者等のスタッフがどのように導いていくのが非常に重要になるといえる。本発表では、大学体操競技部における例をもとに、これまでの競技に対する考え方やオフ期のトレーニング段階から競技会までの取り組み方、限られた出場権を得た後に選手がどのような想定で競技会に臨もうとしていたのかといった点に着目し、そのあり方について検討する。そこでは選手の技術向上とそれに伴ったモチベーションの高まり、一方で現代の多様な価値観の中でチームのために「個」を抑えなければならない葛藤といった様々な視点の中で、指導者が選手にどう関わっていたのかを見つめなおしていくものである。

Oral (Theme) | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 📍
Room2201(Education and research building block2 2F 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

Chair:Hironori Tanigama

3:50 PM - 4:10 PM JST | 6:50 AM - 7:10 AM UTC

[競技スポーツ-B-02] Preliminary development and implementation of a mental health literacy education for sport teams (心)

Mental health literacy in competitive sport settings

*Yasutaka Ojio^{1,2} (1. National Center of Neurology and Psychiatry, 2. The University of Tokyo)

Background: While the importance of mental health support for athletes and coaches has gained increasing recognition, the lack of structured and context-specific educational opportunities remains a significant challenge. This study aimed to develop and implement a feasible, team-based mental health literacy education program in Japan using the Japanese version of the Mental Health in Elite Athletes Toolkit published by the International Olympic Committee (IOC), and to explore its preliminary effects. Methods: Team-based sessions were conducted with competitive sports teams by a collaborative team comprising trained athletes and mental health professionals. The program included psychoeducational modules on mental preparation during competition, the relationship between mental health and performance, and strategies for self-care and help-seeking. Audiovisual materials were also incorporated. Program effectiveness was evaluated at three time points—pre-program, post-program, and follow-up—using validated measures of psychological safety in elite sport environments (Sport Psychological Safety Inventory; SPSI), mental health literacy (MHL), and intention to seek help. Results: The program was designed to facilitate athletes' ability to verbalize their mental states and to foster more proactive help-seeking behavior. As of this writing, preliminary pre-post comparisons were conducted with 11 participants. Significant improvements were observed in SPSI scores (from 22.6 to 29.5, $p < .001$) and MHL scores (from 30.1 to 36.6, $p < .001$). These findings are based on interim data and should be interpreted with caution. Updated results based on a larger sample will be presented at the conference. Conclusion: This program demonstrates potential as a practical, athlete-centered educational model to promote mental health literacy in sport settings. Future directions include scaling up the program to more teams and participants, integrating coaches and staff, and conducting long-term follow-up to evaluate sustained impact. Ongoing implementation and systematic evaluation will be essential to establishing the utility and generalizability of the program across diverse sporting contexts.

Oral (Theme) | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 📍
Room2201(Education and research building block2 2F 2201)

[1a502-04] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

Chair:Hironori Tanigama

4:10 PM - 4:30 PM JST | 7:10 AM - 7:30 AM UTC

[競技スポーツ-B-03] チームスポーツにおけるエリート競技者の「育成」と「強化」に関する検討（哲）

*Itsuki Otomo¹ (1. university of Tsukuba)

各中央競技団体はプロ選手や日本代表を目指す中高生アスリートに対する取り組みとして、一貫指導の観点から指導方針を作成している。指導方針では、中高生指導に対する理念として「育成」と「強化」が重視されている。日本バスケットボール協会を例に挙げれば、「育成」は主に選手個人の技術や身体能力を向上させること、そして「強化」はチームとして勝利を目指すことであると定義されている。しかしバスケットボールをはじめとするチームスポーツにおいて、コーチが選手たちに身体的な優位さに頼ったプレイをさせる状況はよく見られる。つまり、勝利のみが目指され、選手個人の「育成」が十分に行われていないのである。ここで「育成」と「強化」の定義に目を向ければ、内山が指摘しているように技術の獲得や向上は勝利という目標の実現に向けて行われるのであり、「育成」で行われることは「強化」としてそのまま言い換えることができる。つまり、勝利追求によって「育成」も実現することができてしまう定義は問題がある。では、「育成」と「強化」をどのように捉え直すべきであろうか。5種目の中央競技団体の指導方針では、「育成」と「強化」の対象が不明であり、かつ「強化」では勝利を目指すための取組が具体化されていないことに問題がある。そこで筆者は「育成」がすべての選手を対象とした、卓越性の向上であり、さらに「強化」がすべての選手を対象とした卓越性の発揮であると捉える。「育成」では目の前の試合での勝敗にかかわらず新たな技術や身体能力を習得、向上させ、「強化」では戦術選択や選手起用によって、選手の卓越性をより強め、発揮させる。新たに捉えられた「育成」と「強化」はどちらも練習、試合において行われるものであり、すべての年齢を対象とする。そして「育成」と「強化」は、繰り返し実践されることが望ましい。